

手書き文字で描くまちの駅  
—図式はないけど形式はある—

22019001 相澤 みなみ  
指導教員 宮 晶子 教授

文字 不整形 公共性  
余白 隙間 形式

1 制作背景と目的

現在の都市には効率性や機能性を重視して作られた建築が多くある。無駄な空間がなく、それぞれの空間に対して機能や用途が決められていて、訪れた人々はその空間に入るとその機能や用途に合った行動を強いられる。人々はその空間を抛り所がなく、窮屈に感じる。

しかし、そんな都市の中でも抛り所はある。それは、意図して作られていない場所である。例えば、ビルの隙間・余白などである。ビルは一つ一つの独立した意図があるが、その間にはなにもない。そこにはルールのない隙間・余白がある。その場所こそが面白く、そして人々の抛り所になるのではないかと考える。

本研究では、都市の中に隙間や余白をつくるために、どのような建築のカタチが最適なのか、アートや自然界の偶然性や、建築作品、人の視覚的な認識を分析する。そして、ルールのない余白・隙間が溢れる新しい居場所を提案する。

2 不整形なカタチの分析

アートから生まれる偶然性のカタチや自然界のカタチ、アールトの建築作品のカタチ、そして自分の過去作品カタチをそれぞれ分析した。

そのなかで、自分の過去作品である「自然の中の時間」の作品に着目した。この作品は図1のようにS字とC字の文字が用いられている。S字とC字のボリュームはそれぞれ独立した意図があり、それが融合していることでそのボリュームとボリュームの間には意図して作られたわけではない余白・隙間ができています。そのルールのない余白・隙間こそが不整形なカタチだと考えられる。



写真1 「自然の中の時間」

また、S字とC字のカタチはコンピュータでみるような幾何学的なカタチにするのではなく、手書き文字を採用することでボリューム自体も不整形であり、その融合してできた余白・隙間もより不整形なカタチになっている。

3 図式はないけど形式はある

3-1 文字の自然性

マーク・チャンギージ氏は『ヒトの目、驚異の進化』で文字を基本的な形態要素に分解すると、LTXFY など20種類ほどに還元でき、いずれも3画程度に収まり、この基本的な形態要素は自然を構成する形態要素と重なるため、すべての文字は自然に似るようにつくられたと考えられると述べている。<sup>(1)</sup>つまり、自然界にみられるカタチは人間にとって認識しやすいもので、文字は自然界の形態要素でできているため文字は人間にとって認識しやすいことがわかる。

3-2 手書き文字

コンピュータの文字は何度も複製可能なカタチである一方、手書き文字は一度書いた文字をどう真似ても同じ太さカタチにはならない。書く人によっても手書き文字のカタチは異なる。同じ人が今日書いた「あ」と昨日書いた「あ」も異なる。このように、手書き文字には無限のカタチがあり、複製不可能なのである。また、文字には人間が反応する形式性をもっている。手書きにより、カタチが崩れても、その文字として認識できる形式性がある。次に、コンピュータの文字には見られない、手書き文字の特徴を分析する。

年齢性別問わず複数の人に、手書き文字を書いてもらった。そこで、手書き文字だけに表れる特徴を見つけることができた。以下に6つの特徴を記載する。

- 1. 交差部のズレ
- 2. 交差部が繋がっていない
- 3. 線がはみでる
- 4. カーブの膨らみ具合の違い
- 5. 直線が曲線になる
- 6. シンメトリーになっていない

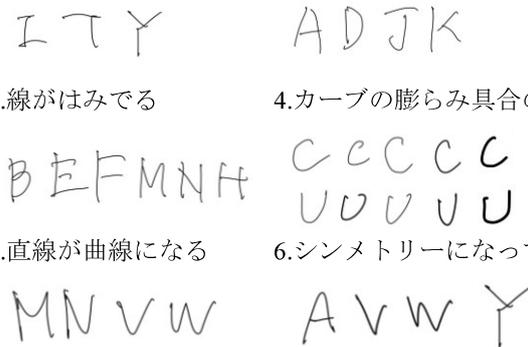


図1 手書き文字の特徴

また、筆圧や線のふるえなども手書き文字の特徴である。このように、手書き文字ならではカタチがみられる。

コンピュータの文字のような幾何学の文字を建築に採用するのではなく、手書き文字を採用することで、「図式はないけど形式はある」となり、文字を用いることで人間にとって認識しやすい建築になるのではないか。

## 4 設計提案

### 4-1 対象敷地

神奈川県横浜市西区みなとみらい6丁目、横浜駅から徒歩12分のところを設計敷地とする。この場所は、西にアンパンマンミュージアム、北にKアリーナ、ホテルがあり、その周辺にはオフィスやタワーマンションなども多くあるため、観光客やサラリーマン、近隣住民などさまざまな地域の人が行きかう場所である。



図1 対象敷地

現在のみなとみらいは漠々としていて、拠り所がないように感じる。整形建築が多く、用途が決められた無駄のない空間ばかりである。加えて、みなとみらいにはパビリオンの特徴のあるカタチの建築も多くみられる。混在してとりとめがつかない場所にパビリオンのありながらそれらの間と間をつくる提案をすることによって漠々とした場所に拠り所を与えるような設計をする。

また、横浜駅と桜木町駅間に位置しているため、横浜駅から桜木町駅までつなぐきっかけとなれるような提案をする。

### 4-2 プログラム

さまざまな地域の人が交流し、拠り所となれるような「まちの駅」を提案する。

### 4-3 構成

ひらがな、カタカナ、アルファベットのなかから一筆書きで書ける文字をボリュームのカタチとして採用する。そして、採用した文字を自ら手書きで書き、それを大小、厚さ薄ささまざまな種類のものを作成し、建築のカタチにする。

動物の群れや、おもちゃ箱をひっくり返したような手書き文字のボリュームがちりばめられていて、大きいものと小さいものが混じり、ボリューム同士が交差し、重なり、周りの動線や環境を考慮しながら配置する。

### 4-4 断面・空間計画

手書き文字のボリュームの中にはまた異なるスケールの手書き文字が出現してくる。それは、二階のスラブになっていたり、壁になったり、もしくは家具になったりする。



図2 異なるスケールの手書き文字

### 4-5 建築の形態

建築の形態に、手書きならではの特徴を取り入れる。

#### 1. 筆圧

文字を書くときに力を入れる部分を壁の厚さや高さを大きくして人が見え隠れするような筆圧の建築ができる。



図3 「筆圧」

#### 2. ふるえ

文字を書いている途中に力の入り具合で少し線がふるえたりする。そのふるえを建築に取り入れることでちょっとした居場所ができる。



図4 「ふるえ」

#### 3. 離れ

文字を書くときに文字の接合部が離れてしまうことが多くある。それを建築に取り入れることで通り抜けられたり、隠れられる居場所になったりする。



図5 「離れ」

このように、手書きの特徴である筆圧、ふるえ、離れを建築にし、手書き文字のボリュームとその重なりでできた自分が意図していない、ルールのない不整形な空間を創ることによって、人々の拠り所となる場所が生まれることを期待している。

### 主要参考文献

(1) マーク・チャンギー：『ヒトの目、驚異の進化視覚革命が文化を生んだ』、早川書房、2020